

報



會

會 岳 山 本 日

97

月 九 年 五 十 和 昭

民族の足

水野祥太郎

吾人の足は人類祖先の歴史の記念塔であり、血のシムボルである。

吾人の足には、我々の遠き祖先が水中生活者としてこの世に在ったことがはつきりと記録されてゐる。またその次代の祖先が始めて地上生活に入つた當時、その足が直接身體から横に突き出してゐて、やがてその後端を持ち上げて廻轉様の運動を行つたことと記録されてゐる。次代の大きな進歩は、横に突き出した足を前に廻はして身體の下へもたらし、前進力の太いに加はつたことである。膝と踵とはその歴史的事實の記念である。この時代から後の人類の歴史——正しく言へば進化史——を足によつて推測すると、我々の祖先は少くともカンガルーのやうに跳び廻らなかつたし、馬のやうに快速力で馳驅することをしなかつた。恐らくは非常につましく、その子孫が現在のやうに地球を蔽ふてはびこるなどと云ふ大きな運命も知らないで樹の枝にチヨコンととまつて果實を漁り、猛禽猛獸の襲撃に對しては、何等の武器もなく、たゞ木の葉を楯にかくれ廻つてゐたに違ひない。吾人の踵はこの祖先の樹上生活の最も大きな記念物であり、吾人の祖先が相當長い間、強敵はびこる地上の生活を恐れ嫌つてゐたことが判るのである。

ゴリラなどの半直立姿勢は、吾人の現在の兩足地上生活に甚だ似てゐるが、これよりは手長猿(ギボン)の生活の方がより吾人の祖先に近い。ギボンは時あつて地上を走ると、恰かも人間のやうに直立してゐて、慌て者の探検者をして矮人發見などと胸をどらしめるのであるが、静止時は手を以て支へなければ倒れて了ふ。しかし、ギボンの生活の大部分は樹上であつて、長い手で枝から枝へとフランクとして木の實をあさつて廻はる。このいさゝか愛嬌味のある姿が吾人の祖先の親近者であつて、吾人の足から充分にそれが推測出来るのである。

に溜息をつくのである。人類の足は現在まだ未完成である。急激な體重増加に追ひ付かなくて、未だに直立歩行に充分の適應を見せて居ない。現今の産業労働者の急激な増加は、一日數時間の立案によつて、多數の足不全症(Insufficiencia pedis)患者を輩出せしめてゐる。

然るに、最近、さらに一層の注目を感じ出したものは、血と足の關係である。民族による足の構造上の相違である。少し細い目のズボンや穿いた人ならば、恐らく御自分の脛の曲つてゐるのを嘆かれた經驗がお有りには違ひない。毛唐の脛は確かに委よく眞直ぐなのが多い。しかしながら曲つてゐるのが、日本人の血としての當然ならば、これを徒らに卑下するに當らないだらう。足についても同様に民族による相違が見られ、足を見れば血が判るとまで極言する人が出て來た。毛唐の足は幅が狭くて長く、甲が高い。本邦人の足は幅が廣く、足趾の筋肉は近東人やアフリカ人のやうな發達を見ず、踵は印度人のやうに突き出してゐない。各々の民族には相當違つた特徴が見られるのである。

「我々にとつて甲高い細手の足が理想型であつても、他のある民族にとつては、或ひは幅の廣いベタ足が理想型であるだらう。」とは、さきの伯林オリムピアードで世界中の選手の足を測つた一毛唐の言葉である。

この足の形が、進化史上に於て最も

吾人の足は人類祖先の歴史の記念塔であり、血のシムボルである。

吾人の足には、我々の遠き祖先が水中生活者としてこの世に在ったことがはつきりと記録されてゐる。またその次代の祖先が始めて地上生活に入つた當時、その足が直接身體から横に突き出してゐて、やがてその後端を持ち上げて廻轉様の運動を行つたことと記録されてゐる。次代の大きな進歩は、横に突き出した足を前に廻はして身體の下へもたらし、前進力の太いに加はつたことである。膝と踵とはその歴史的事實の記念である。この時代から後の人類の歴史——正しく言へば進化史——を足によつて推測すると、我々の祖先は少くともカンガルーのやうに跳び廻らなかつたし、馬のやうに快速力で馳驅することをしなかつた。恐らくは非常につましく、その子孫が現在のやうに地球を蔽ふてはびこるなどと云ふ大きな運命も知らないで樹の枝にチヨコンととまつて果實を漁り、猛禽猛獸の襲撃に對しては、何等の武器もなく、たゞ木の葉を楯にかくれ廻つてゐたに違ひない。吾人の踵はこの祖先の樹上生活の最も大きな記念物であり、吾人の祖先が相當長い間、強敵はびこる地上の生活を恐れ嫌つてゐたことが判るのである。

吾人の足には、我々の遠き祖先が水中生活者としてこの世に在ったことがはつきりと記録されてゐる。またその次代の祖先が始めて地上生活に入つた當時、その足が直接身體から横に突き出してゐて、やがてその後端を持ち上げて廻轉様の運動を行つたことと記録されてゐる。次代の大きな進歩は、横に突き出した足を前に廻はして身體の下へもたらし、前進力の太いに加はつたことである。膝と踵とはその歴史的事實の記念である。この時代から後の人類の歴史——正しく言へば進化史——を足によつて推測すると、我々の祖先は少くともカンガルーのやうに跳び廻らなかつたし、馬のやうに快速力で馳驅することをしなかつた。恐らくは非常につましく、その子孫が現在のやうに地球を蔽ふてはびこるなどと云ふ大きな運命も知らないで樹の枝にチヨコンととまつて果實を漁り、猛禽猛獸の襲撃に對しては、何等の武器もなく、たゞ木の葉を楯にかくれ廻つてゐたに違ひない。吾人の踵はこの祖先の樹上生活の最も大きな記念物であり、吾人の祖先が相當長い間、強敵はびこる地上の生活を恐れ嫌つてゐたことが判るのである。

吾人の足には、我々の遠き祖先が水中生活者としてこの世に在ったことがはつきりと記録されてゐる。またその次代の祖先が始めて地上生活に入つた當時、その足が直接身體から横に突き出してゐて、やがてその後端を持ち上げて廻轉様の運動を行つたことと記録されてゐる。次代の大きな進歩は、横に突き出した足を前に廻はして身體の下へもたらし、前進力の太いに加はつたことである。膝と踵とはその歴史的事實の記念である。この時代から後の人類の歴史——正しく言へば進化史——を足によつて推測すると、我々の祖先は少くともカンガルーのやうに跳び廻らなかつたし、馬のやうに快速力で馳驅することをしなかつた。恐らくは非常につましく、その子孫が現在のやうに地球を蔽ふてはびこるなどと云ふ大きな運命も知らないで樹の枝にチヨコンととまつて果實を漁り、猛禽猛獸の襲撃に對しては、何等の武器もなく、たゞ木の葉を楯にかくれ廻つてゐたに違ひない。吾人の踵はこの祖先の樹上生活の最も大きな記念物であり、吾人の祖先が相當長い間、強敵はびこる地上の生活を恐れ嫌つてゐたことが判るのである。

この足の形が、進化史上に於て最も

目次

- ・民族の足……………水野祥太郎……………一
- ・サギタル……………跡部昌三……………二
- ・山の名、山の地名(三)……………白馬……………四
- ・若尾金造氏を悼む……………松次郎……………五
- ・K2・一九三九年(一)……………吉澤一郎……………六
- ・吉野群山に入る……………橋本三八……………六
- ・「登山家の標準に段」なる記事に就て……………八
- ・圖書紹介……………一〇
- ・會員通信……………一〇
- ・山岳部欄……………一一
- ・會務報告……………一二

總て足を基として、この民族の血の流れてゐる足に立つて行はれるからである。

今少しく私の言ひ度い處を具體的に示すならば、讀者の方に御自分の靴と足の關係を考へて見て戴き度いのである。恐らく大多數の人は、小趾の部分が底から外に喰み出してゐることを發見されるだらう。これは

足の踏みかへし運動の軸と、靴のそれに根本的な喰ひ違ひの存するに由るのであつて、御自分の靴底をかへして御覧になれば、靴底の形が餘りにも足を無視して内側にネチれてゐるのに一驚されるだらう。この型の靴底は、獨逸の解剖學者 V. Meyer 教授の提唱にかゝるものであつて、特にアメリカで廣く用ひられ、恐らく我國の現状はアメリカ直輸入としてこの型以外の靴を見受けないままで至つたものと思ふ。これが、私の見る所によれば、決して日本人の足にうつて付けたものであると思へな

昭和十六年度 山日記

は内容に種々改訂を加へ本年十一月下旬發行の豫定であります

いのである。少くとも日本人の大多數はその自覺すると否に拘らず、多少とも不便な思ひをしつゝ靴を履いてゐるに違ひないのだ。これが、長途の行軍や登山のやうな場合、足に無用の負擔をかける結果となり、不測の損害を與へてゐるのである。

獨逸に於ても實は、V. Meyer の靴の矛盾性が指摘され、靴の與へる文明病が筆舌をつくして警告されてゐる。靴を脱いで跣足に歸れ、原始人の跣足生活こそ理想であると云ふのである。我が名譽ある東海の民族はこの點彼等に誇示すべき先覺者であつて、毎日の生活の中には、必ず

この理想の原始的跣足生活が、軟か過ぎず堅過ぎざる疊の上で行はれてゐる。「日本人は玄關で必ず靴を脱いで家に入る。これこそ我々の最も範とすべき生活様式だ」と云つたことが昨年()だかの獨逸の某學會で論じられてゐたが、或ひは、今頃あたり、家にある時は靴を脱ぐべしと云ふナチスの法令が發布されてゐるかも知れない。足不全症は日本では單なる工場労働者か看護婦かの問題であるが、アメリカとドイツでは家庭婦人の直面する大きな社會問題であるからだ。

況んや幼少時より下駄でノバされ、踵のないゴム靴で鍛へられ、しかも祖先の樹の枝でブランコした様子が毛唐とは違つてゐたかも知れない日本人では、民族の靴を今少しく眞剣に考慮すべきではなからうか。殊に登山者にとつてこれは大きな關心事であらう。

この問題は尙充分の自信を以て結論を申し上げる域には達してゐない。足自身の問題、製靴技術上の問題、經濟上の問題など、關聯する所多く、その各々のアスペクトを吟味するのみでも相當の紙数を要するので、他日稿を改めてお目にかけたい。たゞ、私自身として尙引續き研究中の問題であり、足及び履物についての文獻の方面、工作技術上の方面について御存知の方があれば、御教示あらんことを希つて筆をおく。

(一五・七二七)

サギタル

跡部昌三



— A —

木曾駒の寶剣岳の木曾側である滑川の源流と、サギタルの頭の伊那側である中御所本谷の一支流、サギタル附近は此の方面での等高線の一帯密なところであると言ふ處に、可成り以前から私達の興味をひいてゐた。

昨年の夏、私達名古屋山岳會の集團登山である木曾駒集中登攀並に分散下降の、登攀ルートの一つとして此のサギタルがとり擧げられたのが、行動への具體化された第一歩であつた。

中御所本谷より分岐した一本の支流は、地圖上にて更に四本に分れて稜線へ喰ひ込んでゐる。果してこれがサギタルの本流となるべきやに就いて、登攀の對象として心にかゝるものがあつた。

私達は、本能的に水の多量なるを本流と思ひ、且つ悪いものを登攀の對象に求め、それを本流としたい傾向を多分に有つ。此の間に於て、赤穂の下村雅司氏に幾度か御教示を求め、中御所本谷から濁澤大峰とサギタルの頭との鞍部に出てゐるのをワル澤、此のワル澤の更に支流であり、サギタルの頭に衝きあげてゐるのがサギタルである事を知るに及んで、私達の前にサギタルと悪澤の二つがなられた。

私達は、木曾駒集散行にはそのワル澤の名稱に敬意を表してこれを溯行する事に決定を見たが、折柄の悪天候に災ひされて此の計畫を放棄し中御所本谷を溯行するに至つた。

その後、仲間にてこのワル澤とサギタルは屢々問題となり、昨年十月に至り成瀬、野尻のパーティによつてワル澤の登攀が報告された。ワル澤は、途中ワル澤の大タル(約二五米)があるのみにて、案外平易なワル澤の名に似ね澤である事が明らかとなり、中御所方面より稜線へ出る手頃なルートである事を、私達は知らされたのであつた。

此の行によつて左岸より二段七〇米の瀧となつて奔流して合流するサギタルの威容がはつきりするに及んで、私達はサギタルに山への心の燃焼を求めた。其の後本年に至つて再三計畫されたが、種々なる事情から容易にまみえる機會もなく、目指す

事三度目に至つて日時關係から之を下降する事にきめ、昭和十五年七月一日、雲霧湧き上るサギタルへの下降の第一歩を、野尻、片桐、跡部のパーティによつて踏み出し、此の夜宮田村へ出て歸名した。

— B —

サギタルの頭の伊那側は、段丘狀を形成してゐて、稜線からはサギタルの源流を窺ふを得ない。サギタルの頭は二つに分れてゐて、私達はその南峰より僅松の薄い所をよつて下り段丘の突端に出た。稜線は快よく晴れ、爽やかな斜陽が石ころの一つ一つにも克明に當つてゐたが、見下す谷間には雲霧が湧き立ち、且つ段丘の下には更に段丘があつて、サギタルへの見當が容易につかなかつた。尾根と谷の走りに注意しつゝ北寄りに下り、霧の切れ間にサギタルと中御所本谷との境をなす尾根がはつきりすると共に、サギタルの上部に立つ事が出来た。標高二八一〇米。サギタルはサギタルの頭の南峰と北峰との鞍部から出てゐる事が確められた。

急なザラ場を下る事僅かにして残雪が出て来る。グリーセードで下つてみたが、東面である此の谷は既に日光の直射を受けて雪が腐り、それに湧きのぼつて来るガスに急角度に落ち込んでゐる雪溪が吞まれてゐる爲、下の見透しもきかず、大事をとつてアイゼンで下降、最初の澤の屈折點で雪溪が切れてアイゼンをとり、間

もなく再び雪溪となるに及んでアイゼンをつける。暫くして右岸より雪溪のある澤が出逢ふ。標高二四九〇米。こゝでアイゼンをぬいで小瀧を二つ、右岸からむと小さいが鳥渡水量をもつた澤が合流し、此の下に八米位の瀧があつてこれを左岸にまく。瀧下からまた雪溪が續きアイゼンを穿いて下る。標高二三九〇米で左岸より小澤が通入つて来る。これは左岸尾根の段丘状をなしてゐる邊りから出て来るものではないかと思ふ。此の邊りクレヴアスが多く、その間から瀧らしきものが見え、たゞり落つ水音が響いて来る。二三三〇米の地點で雪溪の不安定を感じてアンザイレレンシ、コンティニアスで下降を續ける。

右岸より瀧のある小澤が合流してきて暫くすると、雪溪が切れて瀧のぞいてゐた。標高二二九〇米、傾斜のある瀧だが雪溪の下から躍り出て雪溪の下へ吸ひ込まれてゐるために高さはつきりしないが一二三米位のもの、假りにこれを「奥のタル」としてをく。これは雪のあるため簡単に左岸を通る。

越て兩岸が岩壁を擁して迫つて来て、爆音が傳つて来る。左へ寄つてそつと覗いてみると、三五米位の瀧が雪から露出して落下、「中のタル」とでも言ふべきもの。左岸岩壁の草付バンドを拾ひ部分的にインタラプテッドを交へて瀧から一〇〇米下の雪溪の上に下り立つ。此の絡みに一

時間十五分を費した。

サギタルの上部は約四五度、「奥のタル」附近で四〇度位の傾斜をもつてゐるが、「中のタル」を境として下部は大部分緩和されて約三五度から三〇度程度である。右岸から瀧をもつ小澤がはいり、續いてカラ澤がある、澤は急に左へ折れ、更に右折する所に「くの字型」の一三米位の瀧簡単に右岸をまいて下る。間もなく右岸より小澤が合してくと八米位の瀧となり、これも右岸に絡む。前方を見ると澤は切り落されてゐてワル澤右岸の尾根の走りが見えてゐる。

落口へザイルを延して覗いてみると十米位の瀧となり、その先で二段となつて反轉落下、ワル澤に出てその下にはのんびりとした雪溪のひろがりが見えてゐる。問題にしてゐた「口のタル」に出た譯だ。之さへこなせばあとワル澤は曾遊の地、急に駆け上つてゐる左岸は矢張り手がぬ。豫ての偵察通りワル澤へまくたのが一番妥當であらう。アイゼンとザイルを外して少憩後、右岸の密林を分けて行く。急な岩壁が出て来たのでこれを高くからんでワル澤との尾根に達してこれを下り、ワル澤



に出てゐるカラ澤を利用してワル澤に立つ。標高二〇一〇米。この高捲きは氣にしてゐた程のものではなかつた。ワル澤はのんびりとして、雪溪をまじへ稜線へのびてゐる。下る事僅かにして標高一九八〇米のワル澤とサギタルの合合に立つて「口のタル」を見上げる。秋、ワル澤入りのバーティがとつた寫眞とは比較にならぬ位水量が多く、堂々たる貫祿を示して落下してゐる。下から二五米、四五米、少し離れてみるとその上に前記の一〇米「口のタル」は三段で八〇米と言ふべきである。

解放された様な氣分でワル澤の緩やかな雪溪を歩く。雪溪が切れてからは、秋には樂に歩けたと言ふワル澤も、今は豊富な水量を流して歩き

づらかつたが、此の澤は既に私達にとつて明らかになつた所であつてみれば心も軽い。途中小瀧二つを右岸に、それから暫くして澤が右折したその先に、ワル澤の「大タル」約二五米のものが落ちてゐる。之も右岸を樂に下り、澤が急に左へ曲つて小瀧が二つ、三つ、其處から中御所の本谷との合合は目謎のうち、本谷には見上げる位置に、二段三〇米程の瀧が濃い緑の中に水量たつぷりと立

派に懸つてゐた。

IC

鬱蒼とした御料林の繁みを縫ふ中御所の流れに心のふくらみを感じ、快よい徑路に潤ひを覺え乍ら下つて来て對岸に御料の小屋を見る頃、ふと來し方を振り返つてみた。

覆ひかぶさる様な緑の間から、遠く彼方に仰ぎ見る稜線、曇つて暮れ間近な空ながら、特徴のある寶剣の岩峰、南へ第一、第二のギヤップ、極樂平そして一つのピークがあつてゆるい起伏で二つに分れたサギタルの頭と、くつきり線をひいてゐる。千疊敷には可成の残雪が認められるが、もう中御所の谷には残雪らしいものは見られなかつた。その外さしたる残雪も見られないうのに、下つて來たサギタルには、サギタルの名稱のよつてくるところの豊かな雪溪が殆んど垂直の襟にかゝげられてゐる。同じ東面の澤でありながらサギタルのみ多量な残雪を抱いてゐる事は、地形の然らしむる事と言へ、興味深いものが感じられた。そして其處に認められる黒點から、澤の屈折に絡む自身達の足跡が、鮮やかに憶ひ出され、山と人とのつながりといふものに就いて、思ふともなく心の隅に描いてゐた。

サギタルは中御所本谷の、さゝやかな支流の一つであつて、陸測五萬圖幅では二六耗の長さ過ぎず、とりたて、云々すべきものではない。最初の段丘である五耗は等高線も粗いが、あと二一耗には三五本の等高線を數へる事が出来る。高度計によれば、サギタルの頭に於て二八八〇米、ワル澤の合合にて一九八〇米を示してゐて、その標高差九〇〇米が所謂サギタルである。

前言した通り、サギタルは「中のタル」を境として上部四〇度から四五度、下部にて三〇度から三五度の傾斜をもつてゐる。此の傾斜と、クレヴアスやシュンドから見る澤の形相から押して、私達は雪溪をうまく利用する事が出来たから問題はなかつたが、雪のない季節ではうるさい小瀧が連續してゐるのではないかと想像される。

私達は七・三〇にサギタルの頭を下りかけ、「奥のタル」一一・二五、「中のタル」一二・二五、「口のタル」一四・〇〇で、ワル澤とサギタルの合合には一五・五〇に着いてゐる。此の所要時間は八時間と二十分であるが、今後は同じ條件ならばかかる時間を必要としないであらうと思ふ。

(二六〇〇・七・二八)

會報原稿募集

隨筆、研究、紀行、消息、會員通信、圖書紹介等の原稿を御送り願ひます。

締切期日は毎月十五日です。



山の名、山の地名 (三)

白馬 耕

四、布引岳 後立山々脈、鹿島槍、冷池間の一峰

この山の頂きをヌノビキノアタマ(布引の頭)と云ふ。「此峰より棒小屋澤に落下する溪流、布を懸けたる如き観あるに因りて此名あり」と云ふ、地質調査所二十萬分一圖に記されたる布引嶽なるものは恐らく此峰を誤りたるものならん、同圖赤鬼ヶ嶽(此邊に此の如き山なし)は略々布引の頭の位置に當る(山岳六ノ一後立山連峰縦断記)。

同山脈中に昔時、奥山廻り役人等によつて赤鬼ヶ嶽の名稱があつたのは今の黒岳に當るであらうと、中島氏が記して居られる(山岳廿二ノ一、黒部下奥山概念圖)。

五、扇澤 同山脈、棒小屋乗越附近に發し龍川谷におちる澤

時としてオホキ澤とも呼ばれるがワウギ澤で、此澤に植物の黄蘗を多く産する所からの命名である(山岳

六ノ一)。自生植物の名前から採られた山中の地名は可なり多い

六、カンカン平 同山脈、鹿島槍岳附近

「本山(鹿島槍)の西南方なる山側にカンカン平と云ふ處あり、冬季雪硬く、カンジキも立たぬ」と云ふ、一名大食(オホバミ)とも云ふ由(山岳六ノ一)。文中

「山側」なる意味がはつきりしないが、ヒラは一般に斜面の意に用ひられてゐる。茲では、尾根又は尾根附近の平らを指すのであらう。オホバミ又はハミといふ地形名で有名なのは槍ヶ岳附近の大喰である。之について「群獸の此附近に來て食物を漁り食ふので斯く名付たり」とある(山岳五ノ一)。大井川上流地、ガツチ(河内)岳附近の大井川に面した廣場にハミバと呼ぶ所あり、之は食場、獸の草を食ひに集まる所と説明がある(同上八ノ二)。或は信越界の小谷地方の方言として「ハミは食むの意か、山梁附近の草地のこと、その大なるものを「大はみ」といふ(小谷口碑集)。要するに緩傾斜の山上の草地に多く此の呼名が充てられてゐる。

このカンカンピラは、「山岳」六ノ一附録の中村氏作の臆測圖によると、鹿島槍ヶ岳から西方へ出てゐる一尾根にあることが記してある。尙、布引ノ頭は同圖によると、同岳の南方直下稜線における最初の瘤としてある。この頭の位置は昭和五年修正

五萬分一陸測地形圖記入のものと同じ、大正元年測圖の方には、この頭が今云ふ冷池の近くになつてゐる。

七、冷池、喰池 同山脈、布引頭と爺子岳(祖父岳)との間

鹿島槍から祖父岳に至る間のだらだら尾根の殆ど中間に位する。明治四十三年七月登山の一行の記録(山岳六ノ一)によると、「地は祖父ヶ岳、鹿島槍間の最低處附近に當れど(中略)人夫等は此處を大冷澤の頭なりと云ひしが、此名稱は寧ろ鹿島槍の一異名とすべき物ならん、池は淺く水も清からねど、飲用水に供したり、一行之を冷の池と命名せり

池水の冷きに非ず、冷澤の上部にあるが故なり」と。大正元年測圖五萬分一「立山」によると、この池は、まだ喰ノ池となつており、尾根上の平らな草地にある池だから、以前土地の人々により斯う呼ばれてゐたのは自然である。後の昭和五年修正圖幅には冷池と記入されてゐる。登山家と土地の獵師、人夫等の地名の呼び方に對する感覺には、こういつた隔りのあることは見逃せない。喰ノ池の方には方言ハムといふ動詞を生かした、例へば谷から熊の奴がこのこと初ひ出してきて柔く崩へ出た草を寝轉るびながら食ふといふ狀景が想像される、なつかしい稱呼であるが、冷池の如き、早期登山者による知性を伴つたそれへの稱稱も決して輕んずる譯にはいかない。登山家の領分に歸するこの種の呼名は、山

を歩く人々にとつて感じよく親しめるものが又良いといふことにもなる。

八、ギジダルの澤、持子尾根 同山脈、爺子岳棒小屋乗越附近

ギジダルの澤は上掲中村氏作附録圖によると、棒小屋澤の一支脈に當り之を辿れば棒小屋乗越に出る。持子尾根はギジダルの直ぐ東側に位する一側稜で種池平の直下になつてゐる。

明治四十三年七月登山の一行は、種池附近について「自分等は之を種池平」と假稱せり、此山脊より棒小屋澤に突出せる側尾根をモチオオネ(持子尾根)と云ひ、其西方にギジダルの澤あり、元と棒小屋なる名稱は此澤より木材を切り出せるに基けるものにて、持子尾根は人夫等が之を負ひ登りたる處なりと云ふ、ギジダルのギジは三十年許以前、此處に横死せる大出の獵夫義次(當字)なるものゝ名を冠せるなり」と記す。このダルはタルミ、タワミなどの地形から採られたものか、迂回して登るといふタオムからか、或は義次に重きを置いて推測すれば、横死のタオレからかと云ふことになるが、何れにしても解釋し辛い詞である。示教を仰ぎたい。

九、赤澤岳 同山脈、標高二六七七、八(五萬分一圖幅)

「赤澤岳の東面(龍川方面)に赤澤あり、是れ岳名の基く處にて或は赤澤の頭とも云ふ。黒部方面にも又赤

澤あり、「赤澤岳一名牛小舎岳の稱あるものゝ如し」とあり、明治九年當時、針木峠道路の拓かれた折、この岳下に牛小舎などが建てられたものだらうか、併し人夫兵三郎等は斯んな別稱を呼ばなかつた。赤澤岳から下看すると、山腹の一部、雪露の右方に小屋路らしいものを見たとき記してある(六ノ一)。

この例許りでなく、山の名にその下の澤の呼稱が移された例はむしろ多い。澤の方が山間の人々と交渉が深いから、義に名前が極るのが普通である。

十、スバリ岳 同山脈、赤澤岳針ノ木岳間(前項補遺)

明治四十三年の登山記録にはこのスバリ岳に關し「元來確定せる名稱なかりし山にて、今回の登山に際し、大スバリ澤に近き峰を大スバリ岳、小スバリ澤の源に當る峰を小スバリ岳と命名したり、信州の方言スバリは狹まるの意に當るものゝ如く、此附近の山容の急峻なることを形容するものゝ如し」とある(六ノ一)。

十一、マヤクボ(鷹渡) 同山脈、スバリ岳、針木岳との鞍部

「人夫等は之をマヤクボと云へり、山崎理學士の(高山の特色)に依れば、信州の獵夫の言葉にてマヤと云ふものは所謂カールなる由なれば、此のマヤクボは一個のカールなるべし……」とある(六ノ一)。

(未完)

「登山家の標準に段」

なる記事に就て

去る六月二十七日附大阪朝日新聞紙上に、右の標題を以て大要左の如き記事が掲載された。

「斯道の發展と遭難防止のため登山家の標準を定めることを日本山岳會で論議中であつたが、東京の定例理事會の承認を得て發表することになつた」と、初段、二段、三段に分つて有段者の氏名が三十人足らず記載されたのである。

本年四月の定例理事會席上に於て遭難防止の一助として、登山者に或る資格を附與し、一定の資格を有する者に非れば登山隊を率ゐて山に入るを得ず、といふやうなことにしては如何と、座談的な提案があつたことは事實であるが、實行の點に於て他の運動競技と異り、登山者に等級を附することは頗る困難なるのみならず、ガイドの如く登山を職業とする者は暫く措き、一般の登山者に段階を設けることはその影響する所も甚大なりとの論も出で、結局何等の決議を見ることなくして終はつたのである。

従つて前記新聞記事に、理事會が「登山者に段」なる問題を數次論議せること、並に之を承認決議せることを記述せるは、全く眞相を誤り傳へたるものなることを茲に明記する次第である。(昭和十五年九月)

日本山岳會理事會

若尾金造氏を悼む

冠 松 次 郎

甲州の若尾金造氏が北支で客死されたこととを、山梨縣の人から聞いて私は驚いた。豫て宣撫班の人として支那へ行かれたと聞いてはゐたが、まさかやう云ふことにならうとは思はなかつた。君も勿論さうであつたらう。眞面目な、徹底して物をやらうとする君の熱烈なる性格はさぞ彼の地に於ても事毎にその本領を發揮されたことであらう。曾て甲斐山岳會を創立されたとき、君は會長として率先してその進展を計られた。事蹟大いにあがつて、その當時は實に盛んであつた。甲斐の山に關する限り君の足痕は沿く、若し君の家事の都合に變動がなかつたならば今日は實に見るべきものがあつたに違ひないと思ふ。

この人を失つて私は愕然とした。早速甲府の會員、大澤照貞氏を煩はして、君の事蹟の概略を書いて戴いた。それは左の通りであつて、私はそれを會報に掲載して、會員と共に君の爲に哀悼の誠を致したいのである。

若尾金造氏略歴

氏は明治二十二年甲府市の舊家、相吉治七氏の次男として生る。のち明治四十五年同市の素封家若尾尾造

氏へ入婿、同家地所部を支配せられ専ら農事指導に盡せられた。氏は年少の頃病弱なりしも、能く身心鍛錬につとめ優れたる健康を得られたりと。日常より徒歩運動の身心鍛錬に有效なるを唱導せられ、自らも弘く江湖の名山を跋渉し、特に山梨縣下山岳に其の足跡を印せざるなし。

大正初期に至り世人一般の登山の風潮は極めて旺盛となり、南アルプスに對する登山家の關心の次第に大なるを認められたるも、當時山梨縣下山岳には何等の施設なきは勿論、完全なる指導機關の無きを極めて遺憾とし、新たに有力なる機關結成の急務なるを痛感せられ山岳會設立を志す。偶々

朝香宮鳩彦王殿下 には大正十一年七月木暮、槻兩氏の御伴にて白峰、駒連峰、御踏破の御事ありて、縣民の山岳に對する認識は一際進展を見るに至る。

同氏は此れを機とし槻氏を招聘して甲府市に講演會を開催し、縣民聴衆に多大の感銘を與へられたるは、山岳會認識の機運を急速に促進せしめ、遂に大正十三年六月「甲斐山岳會」の誕生を見るに至る。爾來親しく會長として指導に任ぜらるると共に

に常に多額の私財を寄せて南アルプスの研究開發に務め、一時は登山界の暗黒面の如き觀ありたる往時の面目を一新し、特異の容相を以つて一部登山家の憧憬の對象たりし南アルプスをして、數多の登山家を迎ふるに至らしめたるは、偏に若尾氏の献身的努力に負ふ所極めて大なりと云ふべし。

又屢々知名の登山界先輩を聘して講演會を催したるを始め、展覽會映畫會を開き、地圖案内書の刊行、機關紙の發行等、山岳文化の上にも寄せられたる處大なり。

特に南アルプス全般に跨る登山小屋の新設(大正十三年)、積雪期登山に具へたる案内人講習會(昭和六年)山岳映畫の製作(大正十二、三年)等山岳會創立と相俟つて、登山界に貢獻せられたるものの中特筆せらるべきものなりと信す。

氏は又農村問題の研究家としても令名あり。滿洲國、蘭領印度の産業を視察せられ、その農事經營に關する卓見は、屢々要路にも進言して重要せられたり。

氏は又熱心なるクリスチャンにして、その重厚なる資性とともに常に宗教界より深き尊敬を拂はれたり。昭和六年疲勞甚しき農村の窮狀を見るに忍びず、農村の合理的振興の運動を提唱し、同年末甲府市外に南岳莊と稱する基督教の農林修養道場を興し、之れを主宰して當時農村に瀕死せる不健全思想撲滅に健闘せらる。

昭和十一年政代令夫人を失はれたるに感ずる所あり、一切の世俗的事業と絶縁し、茲に殉教的信仰生活を始めらる。

昭和十三年八月東亞傳道會より支那難民救済の爲派遣せらるる事となり、其後迎えられたる起微子夫人同伴敢然大陸に渡り、未だ兵匪出沒して物情騒然たる上海郊外、太倉縣城に傳導所「憩ひの家」を開き、皇軍將兵のよき慰安所に提供するとともに支那民宣撫施療に従事したり。

昭和十五年五月不幸風土病の冒す處となり、療養の甲斐なく崑山普州病院にて逝去せらる。行年五十二。氏に二男二女あり。長男徳平氏は目下慶大法學部在學中なり。

(尚氏は教育、農會、青年團其他等にも盡瘁せられる處少なからず。)

大澤 照 貞

會費未納の方へお願い

本年度會費未納の方がまだ相當ありますが、會計の方では資金の缺亡で相當に困つて來ました。若し今月中迄に送金して戴かないとどうしても個別的にお願ひ状を出さねばなりません。すると手數もかなり費用もかかりますから、どうぞ會計係を困らせないで至急御送金の程切にお願い申し上げます(會計係島山、中司、塚本)



K2: 1939年

…(1)…

吉澤 一郎

隊長フリッツ・ウィースナーの手記によつて昨年度の米國K2遠征隊の行動を報告する。本年度のアメリカン・アルパイン・ジャーナルがまだ来ないので此の記述は暫定的なものである事を豫め御諒承願ひたい。

× × ×

四月十日 ボンベイ上陸、ヒマラヤの低山地方で三週間スキー練習。スリナガー、ゾージ・ラ、インダス河、スカルプー、バルトロ氷河。

六月一日—七月十四日 高所天幕の設置、ルートは前年のハウストン隊同様アルプツチ稜(南稜)

C1 (一八、五〇〇呎)

C2 (一九、二九〇呎)

C3 (避難天幕)

C4 (二一、五〇〇呎)

C5 (二二、〇〇〇呎)

C6 (二三、四〇〇呎)

C7 (二四、七〇二呎)

C8 (二五、三〇三呎)

六月一日より十六日までの行動を略記すると次の通りになる。

六月一日—十四日 天候比較的稳定、C1、C2を建設。其の間上方は吹雪。

六月十五日、十六日 B・Cまで猛烈な吹雪に襲はる。

以後数日 天候不安定。C4建設次の一週間 猛吹雪にて行動停止

七月六日 ウォルフ、ウィースナーは三人のシェルバを伴ひC5設置

三日間 吹雪。

七月十日 ウィースナーは二人のシェルバを連れC6及びC7建設。

二日間 吹雪。

七月十三日 全員殆んどC7に突進。

七月十四日 ウォルフ、ウィースナー及び三人のシェルバC8設置。

七月十五、十六日 吹雪にて停滞

七月十七日 ウィースナーとバサン・ラマの二人は重い荷を背負つて南東稜の肩に達した、こゝはおおよそ二五、三五四呎の高度を持つてゐる。ウォルフは途中のクレヴァスからひとりとC8に戻つた、はじめの豫定ではもつと上に登つてテントを張る事になつてゐたが、前記のクレヴァスに意外の時間を消費したため、この肩の所へ一先づ第九番目のCを張る事となる。翌十八日最後のC10を二五、五九〇呎に設置し、次の十九日に二人はいよいよ山頂攻撃にとり

吉野群山に入る

橋本三八

九州からこの地方の山へ入ることは、よ程の熱意が湧くか餘裕のない限り、同じ登山するのなら、中部の方へと向いてしまふのが常であつて、どちらかと云へば敬遠されてゐる一劃、未だ嘗て遠征した記録もない。

それが今回事ひ掛けなくも會社(八幡製鐵)の方で、調査する事が出来、それに山岳部も参加することになつた。吾々が従来から希望してゐた、資源調査とのタイアップが實現したのであつて、個人としては恐らく一生見ずに終つたであらうこの群山に、中心部は一通り歩けるプラシマまで容れられて、願つてもない好機は到來した。

早速、最近に發表されたこの方面の記録を一通り集めて眼を通してみた。詳細が判つてみるとこの群峰が充分日本山岳の一部を代表するものを持つてゐることを知つて、あはや敬遠に終らうとする一瞬に、救はれた思ひであつた。

同行者に會員である藤崎君を加へて調査の技師とも一行四名、十五日間の豫定で、五月廿八日に八幡を出發した。

途中、丹波にある會社の坑山を二日見學、ついでに近くの、多紀アルプスといふ、ハイキングの山を歩い

た。岩はあり、森林あり、野あり、それにウツギの花、ツツジの花は今を盛りと咲いて、いゝ氣持の手輕アルプス歩きができた。

再び大阪に引返して、西岡氏を訪ひ、今回の踏査に就いて種々と、懇切な教示やら、山の話を聴いて、先づ大杉谷から入ることにして伊勢に廻つた。

三瀬谷驛に都合よくタクシーがあつたので、大杉まで、重い荷物は擔がすにすんだが、途中、前以て案内者と、人夫を依頼して置いた、大杉村役場で、別に何の用意もしてゐてくれなかつたのは、後になつて痛かつた。

大杉谷に着くとその足で、F君と二人、大杉谷を少しでも覗いておくと、午後半日を地池谷の合出附近まで入つて見る。

いよいよこれからが奥地といふところで、時間が無いので引返さねばならなかつたのは、残念であつたが、先づ大杉谷の匂ひは感じて来る。

地池谷には道がついて、父谷の方へも越せると、途中で教へられた。計畫としては第一日を、父谷へ入り尾根を越して不動谷へ出、桃ノ木橋を渡つて岩小屋泊りとしてゐたが案内者として頼んだ山本君(大杉旅館の息子)が父谷は知らない、本谷の方なら二三回案内した、外に案内出来る者は居ない、と言ふので、殘

念ながら父谷はオミットせねばならない事になつた。

奥定神社趾からいよいよ溪流に入る、千尋瀧までは別に驚くほどの溪相でもなかつたが、千尋瀧から、果然谷は迫つて、淵、瀧、嵩と、大杉谷の眞髓に觸れてきて、渡渉の苦勞も忘れ、感激しては茫然と佇んでゐた。

岩小屋に一泊して、次の七つ瀧瀧から堂倉合出までは、づい分悪いと聴かされてゐたので、そこ迄を一日行程と考へてゐたところ都合のいゝ事に、大軌でやつてゐる棧道が殆んど完成してゐて、すい分樂に、と言つても話と比べてのことであつて、瀧を高捲きする棧道の上下にきへ相當疲勞させられたからこれがなかつたらやはり一日以上の仕事となつたであらう。

堂倉の合出からも、すぐ尾根に道が出来てゐたので、季ヶ嶽には四時過ぎには着いた。

今頃は大軌の道も完成してゐるだらうし、岩小屋の對岸には山小屋も出来るらしいから、この探勝もいよいよ樂になることであらう。古い桃ノ木橋も修理されてゐたし、朽ちた棧道等も丈夫なものに取替へられてゐた。

大台ヶ原では、特殊な高原風景が吾々には新しい感覺であつた、公團的なものがなかつたら、もつと印象的であつたにちがひない。季節外れでガラシとした大台教會

かゝつたのである。

そのルートは南東稜に沿ひ頂上直下にある垂直の壁の根本に向ふもので、彼等はこの根本の西端に達した。こゝは海拔約二七、四七〇呎、頂上の比高は僅かに八二〇呎であり、第一回のハウステン隊よりは一、四三〇呎即ち四〇〇米突以上も頂上に近づいた譯になる。

頂上の稜へ續く小さな雪田へはもう二十碼ばかりのトラヴァースしかなかつたが其時は最早午後七時となつてゐたので一先づ「C」に戻ることにした。天氣はよかつた。いよゝ二日後はあの頂上に立つことが出来るのだと確信しつつ二人は「C」に戻り（午前二時半）その日一日を休養に當てた。

七月二十一日 二人は早朝に出發山稜の西側へ出る岩場越えが相當長くかつ困難に思へたので、南東稜とその東に當る巨大な氷壁との間にある繩形のルートに心惹かれた。彼等は再び壁の直下まで登り、東にトラヴァースして氷壁の西端邊りで終つてゐる雪の段接の頭に向つた。しかし繩形ルートの雪はあまりにもかたく金標（前前日の下降の際に落してしまつた）なしでは到底登ることの不可能なのを知つて一應不足の食糧と金標を持つて来るためにC8へ下ることに決心した。

七月二十二日 C8に着いて見ると、そこにはウルフ一人だけがあつて下のC7までも十七日以来登つて

来た者がゐないとのことである。そこで三人はC7に下り、十四日に残して来た筈の多量の糧食と燃料とを持つて来ようと相談が決つた。しかしC7には二つのテントが放り出されてあり、しかもその一つは破れてゐた。料理用のストーヴと糧食はあつたが、寝袋と空氣清團は一つも残されてゐない。時間も遅かつたので三人は一箇の寝袋と清團だけで寒い夜をそこで明かした。下降の途中C7の上の所で順倒したためそれ等のものを落してしまつたのだ。

次の日ウィースナーとラマはウルフを残して下方の「C」に向つた。C6もC5もC4もほとんど同じ状態であつた。C2には二つのテントが立つてゐたが内容は何もな

い。二人はこゝで他のテントを毛布代りにして二回目の寒夜を過ごし、その翌日とうとうB・Cまで下つてしまつた。

前進隊が上にある時、七月の十三日クロムウェルはデューランズの病氣により人夫を残して下降した。その時C6に残つたシュルバ達は今後の行動に對する指令を受けてゐたのである。テンドラツツとバサン・キ

タールは七月十四日の夕方C8から下り、十五と十六日は曇天でしかも風が出てゐたのでC7に残つてゐた。十七日は晴天であつたが、二人はC8へは登らず逆にC4へ下つてしまつたのである。（續く）

に泊つて、次の日は大蛇崙を往復して、小雨の中を河合に下つた。開拓といふ處は話にたがわぬ清境で逍遙したいところであつた。

木和田の爺さんに北山宮の面白い後日話を聴きながら、小椋川を河合に着くと、村では昨夜、殺人事件があつたと言つて、狭い道路には鮮血が散つてゐた。陰鬱な空氣の中を、異様な吾々は取付くところもないやうな氣持で、ようやく奥の宿屋に泊めてもらつた。

河合に泊り、前鬼に泊つて、このあたりちよつと息を抜いたのだが、大峰の縦走路は思つてゐたより悪く、宿跡の水場には水がなくてかなりの苦悶となつた。

この縦走路での收穫は、佛經ヶ嶽附近の原始林相と、兩側に流れ込む素晴らしい原始林の谷の景觀で、それに尾根筋を埋める高山植物の群落も九州の山では見られない珍らしいものがあつた。

彌山の參籠所は無人で化物屋敷のようになり散らされて、すぐには足を踏み込めなかつた、しかし水は溜り水だから澤山にあつた。

途中揚子の宿跡に新しく小屋が出来てゐたので一服したが、造り放しで不潔で、折角の新造小屋にしては不親切と思つた。骨は頑丈に出来てゐたが、屋根の薄板はもうハジケてゐた、雨が降つたら漏るだらうと心配もした。

水は此處は全山中第一に豊富なものであつた。

行者還の水場も小屋がある程なのに、哀れな點滴で炊事など思ひも寄らない。天氣續きのせゐであらうが、これでは豫想が外れて困ることにならう。

水は潤れてゐたが豫想外の好天氣で、順調に山上ヶ嶽に着くことが出来たのは幸であつた。

山は丁度大阪方面の講語りで賑つて、珍らしい行者風俗を観察することが出来た。山伏姿にルツクサツク、山靴、國防服にたすき掛け、手には錫杖。ニッカーにウインドヤツケ、それでも何か一物はぜひ行者の持物のところがハイキングと異つてゐるところ、珍妙様々な風體は一見物の價值がある、そしてその中に完全な行者姿が見つかると思はうらしい。

宿坊では、途方もなく朝早くから起されて、思ひもない早出發となつた。群體、朝もやに霞んだ吉野の山に名残を惜しみながら柏木に下る。

實際に入つてみると、それまでは片鱗でもと思つてゐたのに、あの峰この溪と、悠ばつた考へが、去り難い心に引もどす。

最後に吉野の遺蹟を尋ねて、この印象深い山旅に更に、悲曲の一奏を添えて歸路に向つた。

末筆に旅の悪印象を書いて、後口の悪きを残すのは本意ではないが、これはこの方面今後の登山者に參考

とも思ふので、あえて記すことにする。

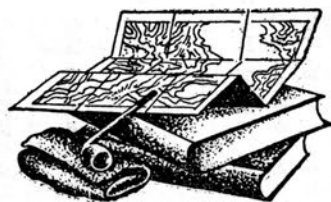
案内者と人夫を役場で用意してゐてくれなかつたので、大杉旅館で依頼したところ、賃金は日當六圓以下では居ないといふのである、それも好んでは行かない、山で働けば十圓から十五圓の収入は當り前であるから六圓は高いとは言へない、と。物の値上りは勿論承知してゐるが、これでは非道い、と思つても、その場合約束するより外なかつた。大台往復三日間、至極不確實なものであつたが案内料も同値といふことで、三十六圓とそれに宿泊料、食費持ちだから、豫算は外れてしまつた。

十四年度の山日記には案内料二圓とある、この時とは既に状態は違ふが、大杉村には山岳會もあること、國立公園として旅行者を呼んでゐる筈、得心のゆく程度の賃金にはして欲しいものである。

この不愉快を思ふとき、無理を言つて大峰縦走に備つた河合在の松平といふ男、四日間の山歩きを實に氣持よくしてくれた、これには賃金三圓五十錢を拂つた、柏木で別れる時バスの中に菓子袋を投込んでくれたほど、よろこんでもくれた。

(六、二〇)

× × × × × ×



図書紹介

PEAKS AND LAMAS

By Marco Pallis,

Cassell & Ltd., London, 1939.

色刷寫眞一葉、グラヴィヤ

寫眞九五葉、略圖三葉

四二八頁

本書は書名からも察する事が出来るが主として「山と喇嘛の宗教」に就いて書かれたものであつて、本文は三部に分れてゐる。

第一部には一九三三年に行つたガンデス河とサトリヂ河の水源地方の旅が記述してある。其の時の同行者は(本文によると)有名なヨット

製作者の子息でパリスの音楽方面での友達であり長い間アルプスや母國(英國)での登攀を共に行つたリチャード・ニコルソン、それから之亦相當名の知られたロック・クライマーでありスキー・ランナーであるF・E・ヒックス、次は保険業に従事し英國では指折りのロック・クライマーでウェイルズでは特に處女ルートの開拓者として名のあるC・F・カー

クス、四人目は屢々アルプスに於て腕を磨いてをり、後に度々エヴェレスト遠征に醫療方面を擔當した事のあるチャールズ・ウォーレン博士、最後に最年長者たるパリス、彼はアルプスに於て多くの登攀經驗を有し子供の時から東洋の、特に印度の歴史と藝術に愛着を持つてゐた人間であるといふ。

彼等はデラ・ダンから徒歩でバギラトヒ(ガンデスの上流 Bhagirathi)パリスによればバギラッティではな(さうだ)河に向ひ、ハルシルからガンゴトリイ河を廻り、ガウムック(牛の口の意)に根據を置いてガンゴトリイ氷河を登り、そこから中央サトバンツフ(Central Satopanth, 23,060ft)については後記しあり)に登つた(但し登頂者はウォーレンとカークスの二人だけ)。此の登攀に於ては一九、五〇〇呎の鞍部から頂上までが相當のものであつたらしい。

それから一行はハルシルに戻り、ネラ峠を踰えてバスバ河に下り、サトリヂ河の本流に出て之を右に廻り(この道は西藏と印度を結ぶ大公路にある)リオ・バルギュール(Rio Pargul, 22,210ft)に登つた(八月十日頂上を踏む)。シュミットのアルビーネス・ハンドブーフによれば此の山に初めて攻撃を行つたのは印度測量局のデニード(Hauptmann Genard)でその時(一八八八年)達した高度は約五八〇〇米突(一九、

四〇〇呎)であつた。(因みにこのスコットランド人デニード兄弟の登攀はヒマラヤに於ける最初の高峰登攀の記録である)リオ・バルギュールには此の他にも傳説的な頂上到達の記録がある。

此の登攀に成功した一行はスピティ河(Spiti)を廻り、スグナムを経てカナムに戻り、此處からサトリヂの本流沿ひにラムプールに出で鐵道の終點シムラに歸つてバジャール、テリーイ地方の旅行を無事に終了した。

パリスの記述によるとガンデスの上流及びサトリヂの支流バスバ河沿岸は大した植物の寶庫らしい。彼は植物の事と並びに宗教に關する事を實に詳細に書いてゐるが、之は私には猶に小判でさつぱり解らない。西藏境のナムギヤ(Namgya)で當時西藏政府から特別の許可を得て當國に入る前スピティ溪谷を下つて來た伊太利の東洋學者で地質學者であるジュゼッペ・ブッチイ教授(パリスは之をTucciと書いてゐる)と醫者兼政府の寫眞技師たるゲルシイ大尉

に遇つたが、リオ・バルギュール峰に登ると云つたら同教授が「やあ、それなら確かに登れるでせう、それはマイダン(此のヒンドスタニ語は平な草地の事)に過ぎませんよ、全く、さうです、マイダンですね」と叫んだと云つて教授のその言葉を不思議がつてゐる。

第二部は一九三六年のシッキム行

で第三部は同年のラダク旅行が書かれてゐる。後者の方は山とは殆んど關係がなく小西藏地方の宗教藝術教育方面の事を述べてゐるので私には紹介の資格が全然ない。

第二部のシッキム行のメンバーは

パリスと前出のニコルソン及びアルプスやウェイルズでの山友達であつたJ・K・クックと、グリーンランド遠征で有名であり、且つ鳥類學者にしてパリスと別れてから拉薩へ行くシッキム行政官の私設秘書として西藏へ行き、その時チモラーリイの初登攀をやつたF・S・チャップマンと、最後にリヴァールールの醫學博士R・ロウフの合計五人であつた。

チャールズ・ウォーレンはエヴェレストへ行つたので参加しなかつた。

最初の目的はモンスーンの來る前にゼム氷河からその周囲の高峰に登り、クックとチャップマンはその後シッキム北部の山に登る。(之は「ローナック行」として前に望月君が雜誌「ケルン」に譯したもので、其の後朋文堂の「ヒマラヤの山々」に再録されてゐる「フリーテッド峰」の完登と「ピラミッド峰」の試登となつたものである)後の三人は西藏研究のためにラダク地方へ旅をするところ云つた計畫であつた。

最初の計畫中にあつたシンヴ峰の登攀は最高キャンプを二〇、〇〇〇呎の地點に張つたが、雪の状態とモンスーンの來襲とで不成功に終つた。世界で最も美しい氷の山といふ

折紙をつけられてゐるシニオルチュIをその時見たパリスが、同年の秋此の恐ろしい到底登攀不可能と思つた山にバウアーの一隊が登頂したといふ事を聞いて非常に驚いたと書いてゐる。

パリスは Bhagirathi, Satopanth, Kedarnath 等と h の間に、を入れてゐるが、之等は皆 that house の場合の t と h の様に別々に發音するものが正しいと書いてゐる、之は一寸注意して置く必要がある。

尚パリス等のリオ・バルギュール及びサトバンツフの詳細な登攀記録については次の書を見られたらいいと思ふ。

“The Gangotri Glacier and Leo Pargul, 1933” by C. Warren (Alpine Journal, November, 1934, pp. 306—320) “Gangotri and Leo Pargul, 1933” by Marco Pallis (Himalayan Journal VI, 1934, pp. 106—26)

又、黒田孝雄氏「ガルワールヒマラヤの登山年譜(山岳・三十二)」中同書一四四頁にも概述されてゐる。

最後に、丁度此の紹介文を書いてゐる時にA・Jの五月號(一九四〇年)が届いたので、パラ／＼とめくつて見たら、カラコラム命名法でお馴染みのメイスンが、此の書の批評をやつてゐるのに氣がついた。相變らず可なり皮肉な書き方をしてゐるが西歐人の心に、困難な佛教の傳統を紹介してゐるパリスの熱と能力だけは認めてゐるやうだ。然しメイス

ンの指摘してゐるやうに、ウォーレンとカークスの登つたといふ中央サトパンツフ峰といふのはつと南方に當る峰であつて、彼等の登つたのは實際はそれより数百呎低い無名峰であるらしい。之は私もハイム地圖を見乍ら讀んでゐた時に、實際のサトパンツフ氷河より可なり離れてゐるなと思つてゐたが、斷定は出来なかつた。彼等の登つたのはバギラットと群中の二一、一七六呎の峰であるとメイソンは書いてゐる。

(吉澤記)

山岳省察

今西錦司著 弘文堂發行

最近、ある友達との話の間にこの出版者から近頃氣のきいた表装の本が出てゐるとの話になり、その時引合ひに出された一冊がこの「山岳省察」であつた。この外装から受ける感じは、それほどスマートなフラス好みだが、書名はいかにも學者らしい堅い感じで、理窟ばいといへばそれまで、要するに學者らしい隨筆集である。そしてそれがまた妙にこの外装、書名から受ける感じとよく融合統一せしめてゐる。

この書に収められた隨筆の諸篇は長短約三十篇から成つてゐる。いづれも一度何らかの形式で發表されたものばかりで、「會報」や「ケルン」でお目にかゝつたものも含まれ、何も新しいものは見出されない。隨筆

集であるから、また「山岳」にのつたやうな雪崩、雪線、垂直分布帯、森林限界線などの研究や「會報」にのつた「山岳研究講話」の如き、體系にまとまつたものはすべて省略されてゐる。従つて過去約十年間に書いたものの全部ではないにしても、隨筆としては殆んど全部がこゝに收められてゐる。これをまたいま新しく讀みなほすことのできたことを深く感謝する。

内容の諸篇の一々についてはこゝに紹介する暇はないが、一讀しての全體的な感想を述べさせて貰ふと、要するに學者らしい知見の廣さと感覺の鋭さに敬服した。「山岳」にのつた數篇の研究論文は實は私を少からず悩めたものだが、それだけ私には分らないながら印象深いものである。あの材料を得るため、君は日本アルプスになど足をふみ入れたことだらう。「飛驒の四日」のやうなあしたのんきな山の旅にも、漠然と歩いては居らず、森林限界や雪線の問題の資料が集められてゐたに相違ない。

とまれ二十代の學生の山の後に、三十代の山をもつゞけ得た著者は幸福だつたといはねばならない。今後四十代、五十代の山がどんな形をとらうとも、所詮山は著者にとつて「仕事に疲れたときにはときどき歸つて行つて翹を休める場所」であるであらう。

今年は「沙漠の船にのらず」久し

ぶりに日本アルプスを足を向けると便りがあつた。恐らく扮装は輕からうが、あの嗅覺と視覺とをいやが上に生かして、そこから何か新しいものを掘り出しはしないかと今から期待してゐる。

(黒田孝雄)

秩父山塊

原 全教著 三省堂發行

著者は「秩父の王子」と云はれる原全教氏だけに非常に廣範に亘つてゐるのみならず、中々稀らしいコースなどもあつて、この方面の山を志す人々には大いに役立つことと思ふ。とは云ふものゝあまりに廣範圍を取扱ひ過ぎた爲めに、本書の最も生命と思はれる、奥秩父の案内が比較的粗雑過ぎることである。奥武蔵や奥多摩邊のことなら、何と原氏を煩はさずとも、未だ適任者が幾人もころがつて居る筈だから、宜しくさういつた前衛の山々は他人にまかせて最つと奥秩父の主脈に主力をそゝいで貰ひたかつた。それが本書を播いて何んとなく物足りない感のする點である。

(中村 謙)

谷川岳・仙ノ倉・苗場山

海野治良著 三省堂發行

海野君は人も知る谷川岳の權威者の一人である。その氏が可なりの努力を拂つてゐた此の本の價値は相當買はれていゝと思ふ。概念圖の

豊富な事、それが詳細を極め且つ正確である事は嬉しい。而もコースの説明にあつて、色々親切に登山の注意を忘れずに書いてゐるのは大變い。初心者必携書であると同時に、中級者上級者にも大いに參考とならう。

書名は「谷川岳・仙ノ倉・苗場山」となつてゐるが、本書の中心をなすものは谷川岳だけであつて、後の二つはつけたりの様な氣もし、實際に於ても後者は前者に比して簡に失し兩者の比例がとれてないのは残念である。又初心者の谷登りとして最も簡単な、武能澤が紹介されてないのはどうしたのであらう。河の右岸左岸を、下流から見て使用してゐるのは宜しくない。こういう時には寧ろ澤の右側左側といふ風に使つた方がいゝと思ふ。

尙N氏の説によると「赤湯」の項の「……等の數軒の宿がある」は實際は一軒しかないさうだ。案内書といふものは大體全部を一々歩き廻つて書くものではないから（尤もさうするのが本當ではあるが）、偶には間違ひもある。然し間違ひはなきに越した事はないのだから充分注意して貰ひたい。

然し本書を讀んでその通り行つて遭難したら、少くとも谷川岳附近に於ては、遭難する人の方が悪いと云へる。それ程この本は信用されていゝと思ふ。

(吉澤記)

名古屋高商山岳部 部報 第十四號

昭和十五年六月廿日發行
菊版八二頁 非賣品

この山岳部の過去に就いては、餘り詳しく知らないが、本號をみて知られることは、此の二、三年來木曾駒の積雪期及びその未知の谷を眞剣に登つてゐることである。主な内容は左の通り。

積雪期木曾駒(竹内)、東川本谷積雪期湖行(小島)、中御所本谷積雪期湖行(鈴木、寶劍澤(鈴木)、大崩谷(鈴木)、木曾駒集中登山に就て(竹内)

右の内最初のものは、昭和十三年三月正澤谷細尾澤をルートに採つて本岳、寶劍岳、三ノ澤岳等に登頂したものであり、次は十四年三月伊奈川の一支流東川本谷を湖行して木曾駒に達したもの、三番目のものは十五年三月に、中御所谷の本谷をめぐり、寶劍岳登頂に成功したもので前の二つは跡部昌三、小島政士兩氏等により本會報八四號、八七號にも概述されてゐる。

登山記録は十三年度、十四年度を含み、豊富な足跡を示してゐるが、主として動いてゐる人が二、三名であることは、山岳部としての力を示すに至つてゐない。

記述の方法は中々結構であるが、残念乍ら誤植が實に多い。今後の活

動と發展とを祈ると同時に、嚴冬の木曾駒の登攀を希望して已まな

Ladies' Alpine Club:

1940

例によつて中々垢抜のした編輯振りで、装釘等も婦人團體の年報らしく満洲なものである。

本文中興味を引かるゝのは、"A Mountain Group in South-west China, 1938" by Dora H. De Beer

右の文章の外には Katie Gardiner の "Mt. Robson and other Climbs" 其他五篇が盛られ、僅か八十頁の本としては一寸眞似の出来ない充實さを示してゐる。

(望月記)

最近購入圖書

- ・中央アジア横断鐵道建設論(湯本昇著)東亞交通社發行
- ・中央アジア踏査記(A・スタイン著)風間太郎譯)生活社發行
- ・十三世紀東西交渉史序説(岩村忍著)三省堂發行
- ・支那の歴史と文化別巻參考文獻(ラトゥレット著 岡崎三郎著)生活社發行
- ・西康・西藏踏査記(劉曼卿女士著 松枝・岡崎共譯)改造社發行
- ・Arctic and Antarctic: The Technique of Polar Travel (Colin Bertram) Cambridge, 1939.

・Der Wandende See (Sven Hedin) 1939

・To the Alps of Chinese-Tibet (J. W. Gregory and C. J. Gregory) London, 1923.

・Recent Norwegian Expeditions to South-East Greenland (Gunnar Horn) 1939.

(十一頁第三段目より)

五色ヶ原・針ノ木・葛温泉。(4)後立山縦走。(5)西山温泉―白峯三山―駒ヶ岳。

是が終りまして葛温泉に全員集合して、七月二十三日から八月三日まで千丈澤に合宿致しました。

例年ならば上高地に集合するので

すが、皆様が御承知の如く、ガソリン難のため、バスの積載量が統制されました。止むを得ず此のコースを採りました。合宿後も穂高生活と湯保生活の二班を出しましたが、天候悪く計畫通りには行きませんでした。物資の缺乏も私達には痛切に感ぜられ、ひどく打撃を蒙りました。が、新人の器具の整備、食糧の購入も轉手古舞の末、何んとか都合出来て無事夏山も大體豫定通り終了致しました。

(法政山岳部委員 石原博和)

山岳部欄への御投稿を切に希望致します 秋山冬山の計畫等其他ドシドシ御送り下さい



會員通信

瑞西だより 田口一郎

久しく御無沙汰しました。僕は昨年夏瑞西に落付いてゐる内に知られなくなつて了ひました。それで知らない月給取となつて、新聞を讀んだりなんかして細々と生活をしてゐます。でもスイスにゐることは面白いです。去る冬は随分スキーをしました。山はベルン近くの二千米台のを少し歩いただけです。仲々出られなからですが、山が近くにあるだけでも満足です。近日モンテ・ローザ(スキーにゆかうと思つてゐます。巴里が陥ちたときは、感慨無量悲しくなりました。どちらが勝つてもいいが、巴里だけは佛蘭西人の巴里に復活させたいものと思ひます。日本は如何ですか? スイスは

だ物資不足も大したこともありませんが、日本は充分酷いやうですね。スイスは今や完全に獨伊に包圍され、今のところ日本に歸るのはシベリア經由が残されてゐるだけですが、それも覺束ないです。まあゆつくりと戦争見物でもしませう。J A C の諸兄によろしく。

(一九四〇・六・一九)

c/o Japanese Legation, 95 Thunstrasse, Berne, Suisse.

兵營だより 今川良雄

拜啓 愈々御清祥の段奉賀候。小生入隊以來七ヶ月餘と相成中候も、内地勤務にて且又經理關係の事とて教練上其他の何等の體驗もなく、軍務に服し居候。乍而永年山に於て鍛え候心身にて愈々元氣旺盛にて軍務に精勵致居候間、御休心被下度候。乍末筆岳友諸賢に宜しく御傳言被下度候。敬具 (七月六日)

中支だより 濱野正男

暑中御見舞申し上げます。皆様御元氣の事と存じます。事變も九三年、未だくです。小生らもなか〜です。最近の山岳會の狀況は如何です。三大學の連中が何か山岳會に要求するところがある様ですが、御きになりましてせうか。新聞によりまして、柔道なんかの様に山にも段が出来た様ですが、競争して早く駆足で登つた者が一番いゝんですか!? 一寸びつくりしました。變轉極まり

向ギ・ナ・ログコ峰には前に(一九三七年?)リチャーズ教授夫妻も登つてをり、又一九二五年にはラムスデンがこの山群に分け入つてゐる由であるが、文獻さへ見附かれれば調べてみたいものである。

本文は十一頁足らずの簡單なもので、地圖も甚だ不完全なのは遺憾で



欄部岳山

早大山岳部

二十数年の吾が早稻田大學體育會山岳部の歴史を眺むれば、其の間幾多の盛衰、改革の跡を見るのであるが、其の部の歩みの消長も、一面に於て入れ替り立ち代りした部員の個性に準じたとも考へられるが、其の中にも一貫した早稻田精神なるもの存した事は、否む事の出来ない事實であり、又一面に於て其の動向が國家と云ふ大きなものの動きに影響されなかつた筈はなく、各時代々々の大きな時潮の流れを反映して居る様に考へられる。

事變が長期に亘り、事變の影響が次第に深刻化するにしたがひ、吾が部に於ても、其の方針と云ふが如きものについて深く考へられる様になり、此處に早稻田精神なるものが再認識せられ再確認せられ、今日の登山界に於て金科玉條とも考へられて居る「マンメリイズム」、又は其の基をなすと考へられる「アルビニズム」其れ自體についてすら嫌ざる何物か

を懐くに至つて居る現状である。吾人の登山は山を楽しむ爲でも、せち辛い世の中を逃避せんが爲でも、將又好奇心からでも勿論ない。

早稻田大學體育會が價值ある存在であると信するが故に、其の體育會の一員として、其の體育會の價值を更に高からしめんとする事こそ、吾人の據るべき根本方針だと信するものである。

他の登山團體と其の存在意義を異にする爲めに、自づと其の方法も異なり、日本のみならず世界の登山界に於ける一の特異な存在の如く思へる。

吾人の登山は入部當時の動機が如何であつたにせよ、一旦入部せし以上、部の計畫に参加すると云ふ事が部員としての權利であり、義務であると云ふ事は、この數年來特に強調されて居る所であり、事實部の目的遂行の爲めには、之を遂行する事が義務なりと云ふが如き覺悟なしでは、到底耐へ得ざるが如き犧牲的奉仕をも要求せられて居るのである。従つて、自分は少くとも早稻田に關する限り、何か業績を書き残す如き場合に於ては、誰々の隊員によつて達成されたと云ふより、早稻田大學體育會山岳部の紀元何年に於ける部員が之を爲したと記録すべきだと思ふ。

以上述べた事も、自由主義が盛んであつた時代に自由主義的登山を行

つた事が認め得られるものなら、今日の時勢に於ける部の方針を又正しむものとして認めるべきであり、且又自分達は昔諸先輩が確信を以て行つたと同様に、今の自分達の考が、今日に於ては全く正しいものと固く信じて居るものであるが、併し之も前述と同じ理由で、十數年後までも同様であるべきだと云ふが如き獨斷を敢てなさんとするものではない。

(磯邊俊明)

法政大學山岳部

私達は五月初旬の三ツ峠に於ける新人歡迎會後、三ツ峠、谷川岳マチガ澤等に於て、専ら新人養成に力を注ぎました。又六月中旬まで約一ヶ月間、元住吉の豫科グラウンド附近に於て、毎週三回位體力養成のトレーニングを行つて夏山に備えました。是は今月初めの試でありまして、短期間ではありましたが、効果があつたやうに思はれますので、九月からも續けて實施致す豫定であります。

私達の今夏の計畫は何等從來の方針と異なる所はありませんでした。

合宿に先立つて七月八日から二十二日まで一週間乃至十日間の縦走に入り、次の五班を出しましたが、天候其他の關係で、コースの一部を變更した班もあります。

(1)中央アルプス。(2)針ノ木—烏帽子—槍—高瀬川—葛温泉。(3)鍾岳—

(十頁第三段目へ續く)

無き世となつた様です。皆様によるしく。(七月七日)

木曾駒 山本敏三

七月十日から木曾駒正澤谷に入りまして、去年は細尾澤をやつたので、今年は本澤をと志しましたが、毎日毎日の雨で谷は物凄い程の増水で、豫定を變へて玉ノ窪澤を溯る事としました。けれども、これとても本澤よりも以上に悪く、雨と徒渉の爲全身ビショ濡れになつて健闘しましたが、第六の瀧で追ひかへされ、左岸の支流に逃げました。この支流の滑(七合澤・假稱)を完登し得たのが、せめてもの收穫でした。頂上の小屋は毎日の雨と、まだ山開も前の爲め無人、とうとう此の山行人中に會ふ事がありませんでした。以上簡單乍ら御通信致します。(七月廿二日)

七月十日 大阪發

十一日(雨) 福島—玉ノ窪岩小屋

十二日(雨) 岩小屋滞在。

十三日 玉ノ窪澤—頂上木曾小屋

十四日(雨) 木曾小屋—上松

十五日 歸阪

赤石・鹽見 轉付峠

青木 昇

いつも夏だけは殆ど動かないのですが、幾年振りに梅雨明けの山旅を思ひ立ち、七月末村尾金二君と赤石塩見、蝙蝠、二軒小屋、轉付と歩いて來ました。車中の混雑は週末を避けたせいか思つた程の事なく、妹さん達と常念に向ふ吉澤一郎兄一行

と同車でした。現在バスは伊那大島驛から小澁川と鹿塩川との出合、落合迄行きます。従つて小澁の湯から先の十數回の渡渉を入れても、廣河原小舎迄は無理のない一日行程と言つたものです。高山の山腹を捲く小澁川出水時の避難路は、最近荒廢甚しく餘程の無理をしない限り通れないとの事でした。

四日塩見登頂、間の岳への山稜を北俣で左に見送り、蝙蝠の三角點を踏んでガンカク尾根を通り越し、惡澤の頂上から北へ派出する二八二七米三角點尾根(新蛇拔澤)の丁度對岸に當る二六〇〇米のボツチから南西へ突出して居る尾根を一氣に西俣櫻島に下りました。此の蝙蝠の尾根筋から櫻島への分れ道は、分岐點の所に立木の幹を削つて其の旨印してあるので分りますが、其の少し手前蝙蝠寄りにある西俣側の水場へ降る行詰り道の印しが、此の櫻島への下降路とも覺しいやうに誌してあるので、其の水場附近では妙からず頭を捻りました。今度此處を通られる方は、何誰でも是非其の水場矢印の上にある「櫻島より廿七町」の文字を抹消して置いて下さると思ひます。柳島と二軒小屋の間程は、現在山道一部崩壞の爲陸涸五萬分圖幅と相違して、其の部分だけは西俣の右岸を行き、其の爲假橋が二個所程地圖よりも多く架つて居ます。夜間此處を通過する方達は注意を要しませう。二軒小屋では何とかと言ふ

一軒しかない旅籠に泊りましたが、人相風態怪異な異臭のする仁と合部屋となり、此方は二人だから良かったやうなもの、誠に薄氣味悪い一夜を過した事でした。其の異人（外人に非ず）は未明三時と言ふに起き出で、我々が起きた時にはもう何處かへ發足して居て姿を見ませんでした。其の日轉付峠を越へて新倉に出ましたが、其處から早川橋迄の例の馬車軌道は、鐵材不足の爲更に奥地の用に供されるとかの事で取除かれ、今年からはバスが一日四往復砂埃りを上げて走つて居ました。時局の波が之れを然らしむるや否やは知らず、山に入るに良く、山を出るに又相應しかつた彼の古風な馬車軌道の愛すべき風情は、既にして早川の谷から消え失せ、何處そかの會社の斧鉞の音のみ南アルプス谷々深く木霊して居るのには、哀愁を覺えざるを得ませんでした。

夏山も往復の乗物の混雜、山裾を歩く間の暑さ等は、誠に嫌な一面ですが之れも精々二千米迄の事で、是から先は輕装と日長の御蔭で澤々つめても尾根をのしても、身心ともにユトリのあるホッホゲビルゲの旅が簡単に樂しめるのですから滿更捨てたものでもありませんね。況や夏は又夏としての他の季節の其れとは違つたモードの力の美しさが、我々の山々の上に豊かに啓示されて居るのですから。

（八月十日雨の降る日、萩窪にて）



會務報告

寄贈圖書
小風土記（結城哀草果著）
後藤幹次氏
焚火（加藤武三著）
加藤武三氏

受贈會報部雜誌

國立公園協會長野支部中部山岳十六
臺灣山岳會 彙報十二ノ七
阪神山岳會 山幸七十八
京都山岳會 京都山岳二十一ノ七
頂山岳會 頂三ノ五
山岳巡禮俱樂部 ガムス二十四
櫻友山岳會 會報一八
築地山岳會 堆石 七月
東京地學協會 地學雜誌七月
マウントロバータグループ

爐邊七
東鐵やまをとこの會 會報二十四
熊本アルコウ會 會報三十一
廣島山岳會 會報一二二
明峰山岳會 M・M・S 8
東京登歩溪流會 會報
關東旅行クラブ 旅路
東京雪嶺會 雪嶺
昭和山岳會 會報三一
東京みなかみ會 みなかみ

昭和十五年九月五日印刷
昭和十五年九月十日發行

東京市杉並區馬場二ノ二四〇
編輯者 望月達夫
東京市目黒區中目黒一ノ七四二
發行者 塚本繁松
東京市芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所 日本山岳會
電話芝（四三）一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區松町一丁目十三番地
印刷者 植田庄助
印刷所 成文堂印刷所

ヒツサツの
専門店
片相
プリント店

本邦天幕製
作業之嚆矢
各學校山岳
部指定製作

東京市神田區神保町三ノ一
電話九段（三三）三二一〇